

〇〇〇〇 様

(心理論文批評コメント)

答えは、心を科学的に研究するとは、どういうことであるかを考えるかを述べ、その上で、その効用と限界を述べるという構成になると思います。〇〇さんの答えはその通り構成できています。

ただ「心を科学的に研究するとは」への答えは、何が正しいといえるほど自明ではないため、いろんな風を書けると思います。

〇〇さんの答案で使われているキーワードを見ると、

「定量化し、徹底した客観性 妥当性と信頼性 量的研究では 質的研究ではこのように、論理的な「穴」を一切排除し少しずつ積み上げてゆくことが、心を科学的に研究することである」 → やや、言わんとしていることが、わかりにくい点があります。客観性、妥当性、信頼性で言おうとしたことは検討がつくのですが。

次のような説明の仕方もあります (いま、つくってみたのですが)。

科学的研究とは、客観的で、検証可能なデータに基づいて導き出した事柄のことだと考えられている。カール・ポPPER (1902-1994) によれば、理論が科学的であるための要件は、反証可能性にあるという。つまり、客観的な調査に基づく情報 (データ) に基づいて、検討を経た、現実の記述とそれを説明する理論をつくるのが、科学的研究であるということになる。特に、それは思い込みではなく、実際の現実によって検証されていることが大切と考えられる。

〇〇さんのように、量的研究、質的研究という二つのアプローチがあることを論述しようとするのは、意味のあることだと思います。

こんなふうに言い方を変えることもできると思います。

量的研究法によって、客観的で妥当な信頼性の高い測定に基づく量的データに基づく法則的・一般的傾向を検討することができ、質的研究法によって、質的データ (語り) に基づきひとりひとりに固有の主観的体験を説明する概念や理論の生成が可能になる。これによって、心を科学的に研究することができる。科学的であるということは、思い込みなどに陥らず、妥当性・信頼性を検討するため、実証的であるということになる。

次は、効用と限界についての論述ですね。

心を科学的に研究することの効用は、人の心の理解を行い、その理解を通して、何らかの形で、人類の福祉に役立つことがある→ わかりやすく、よいです。

論点として、心を科学的に研究したことを人間の福祉に役立てると言うだけでは十分ではないように思います。

論じる材料としては、心の現象についての原因や治療についての考えが、科学的に検討されずに、誤った思い込みに影響されてしまうことを予防できると述べることも意味があります。

次に、限界とは何を言えばよいのでしょうか。科学的であろうとすることが難しい面もあるということ、あるいは、科学的知見は、効用ばかりでなく、有害な影響を与える場合もある事などでしょう。簡単な話が、憶測がまことしやかに科学的真実として論じられるとむしろ有害な結果に陥ることもあります。

〇〇さんの指摘は、3点とも、すごく意味深い指摘だと思いますなお2つ目と3つ目は同じこととして、まとめたほうが読みやすいかもしれません。

心を科学的に研究することの限界は、1つ目は、心を語る言葉と科学的な用語とは異質であり、心を語る言葉は科学的用語に還元することはできないという限界である

2つ目は、もし、人間と同じようなロボットが登場したときに、そのロボットは心を持っているだろうかと考えてみると、これは科学的な基準により決定することはできないということである。3つ目は、何が悪いことで、何が叱ることを正当化するか、これは倫理の問題であり、科学の問題ではない。

これは、よく考えられていました。科学を超えた判断があるという意味で、科学の限界と言っていると思います。以上

全体として、よく考えられています。

感想として、

効用とは、よいことをするだけでなく、間違いをしなないでいれることも入ってくる。

弊害とは、有害なことをするだけでなく、よいことが行われなくなることも入ってくる。

科学的であるか否かだけしか考えないようになると、幸福から遠くなる側面が、人間にはある。また、よいか、わるいかというのは、全員にとって当てはまる場合だけではなく、一部の人々にとってよいことが、他の人々にとってわるいこともあるということもあるなあ、といろいろ考えることが出来ました。

心を科学的に研究することの効用と限界について述べよ。

〇〇〇〇

心を科学的に研究するとは、不明瞭な人の心を定量化し、徹底した客観性を求めていくことと考える。そして、そうした研究には、理論的背景となる妥当性と信頼性が必要不可欠となってくる。

量的研究では、実験室環境や刺激、手続きなど、どこまで細かく記述するかで、妥当性や信頼性は高まる。また、質的研究では、豊富な先行研究の中から、引用を多用することで妥当性や信頼性は高まる。このように、論理的な「穴」を一切排除し少しずつ積み上げてゆくことが、心を科学的に研究することであると言える。

そして、心を科学的に研究することの効用は、人の心の理解を行い、その理解を通して、何らかの形で、人類の福祉に役立つことがある。つまり、日々の暮らしを起点に人間の営みを考え、日々の暮らしに根ざした日常から問題を発掘し、研究の成果を人々の暮らしに役立てる使命を持っていると考える。社会においても心の視点が求められており、マネジメント等に役立てられている。心を研究することによって、カウンセリング力や人間理解力、コミュニケーションスキルの向上、実生活に役立つとも考えられる。

心を科学的に研究することの限界は3つ考えられる。1つ目は、心を語る言葉と科学的な用語とは異質であり、心を語る言葉は科学的用語に還元することはできないという限界である。2つ目は、もし、人間と同じようなロボットが登場したときに、そのロボットは心を持っているだろうかと考えてみると、これは科学的な基準により決定することはできないということである。それは一般論的には社会的なコンセンサスにより決まり、個人的には各人の趣味や状況により決まる。つまり、高度に進歩したコンピュータやロボット、他の生物が心を有するかどうかを決めるのは、社会とそこに属する感情を持つ個人であり、科学ではないと考える。3つ目は、何が悪いことで、何が叱ることを正当化するか、こういう問題で科学的なデータを幾ら集めても答えは出ない。これは倫理の問題であり、科学の問題ではない。心的現象の大部分は、科学的な説明を要求するものではなく、倫理的な観点からその妥当性が問われるような性質のものとなる。

以上により、心を科学的に研究することの効用と限界について述べた。

次ページに、答案例を作ってみました。いろんな書きようがあると思います。

科学の要件とはなにかを書いて、「心を科学的に研究する」とは、ということかをかければよい。「ただの思い込み」ではない「心の働きに関する知識」を得るということを言うために何を書くかですね。

(さて心を研究する、ということと、その研究方法が科学的か、ということについて何を言うのがよいのかということが、一つ目のポイントになります。)

答案例

1. 心を科学的に研究するとは

まず「心とは何か」、「心の働きとは何か」を、わかりやすく具体的に述べようとすると、ひどくむずかしいことに気付く。「心の働き」と一言と言っても、外界の刺激を感じ取り、それが何であるかを判断するときにも、浮かんでくる印象や記憶などや、湧いてくる感情などを感じながら、反応し、思考し、行動しようとするのは、すべて「心の働き」であると、私たちは思っているからである。一方で、心が体の中の脳の働きであると言っても過言ではないけれども、脳を取り出しても、私たちが体験していることが、手に取るように観察できるわけではない。しかし、私たちの心の働きの仕組みや、心の働きの決定因についての知識を増やすということは、ある程度はできると考えられる。

次に、科学的研究とは、客観的で、検証可能なデータに基づいて導き出した事柄のことだと考えられている。カール・ポPPER（1902-1994）によれば、理論が科学的であるための要件は、反証可能性にあるという。つまり、客観的な調査に基づく情報（データ）に基づいて、検討を経た、現実の記述とそれを説明する理論をつくるのが、科学的研究であるということになる。特に、それは思い込みではなく、実際の現実によって検証されていることが大切と考えられる。

心理学の歴史を見ると、心の現象は本来的に主観的な事柄から成っているのだから、被験者本人の報告をデータとしようとしたヴェントの内観法心理学があり、他方で客観的に測定可能な行動だけをデータとした行動主義心理学があった。しかし現代心理学は、質問紙法データも含め、データの主観・客観の問題には、とらわれてはいないように思われる。

2.心を科学的に研究する効用

心を科学的に研究する効用のひとつは、心の働きの障害の原因についての誤った憶測から生じる弊害から人間を解放できることである。たとえば自閉症の原因をめぐる誤りが、かつてあった。親子関係の問題が原因で、子どもに自閉症症状が起きているのではないかという懸念が払拭されるまでに、20年以上が経過したことは、心理学の科学的研究の効用を示唆する一例である。また、現実の問題、たとえば職場ストレスを緩和す

るために、環境や制度の何をどのように変えるのがよいのかという方略が、研究成果の適用として生まれるならば、科学的に研究することの効用である。

3.心を科学的に研究することの限界

科学的な検討を経た結果であるということは、素人にとっては、簡単に信じやすいということであるため、間違った予測を安易に信じてしまうことになりやすい。

また、実際は、様々な要因が複雑に交絡しているかもしれないが、研究者が要因を見落としてしまうこともある。また人道倫理的に許されない実験は、研究の限界である。

ほかにも、限界がある。たとえば安全設計には、1万年に1度の大地震が起きることは想定していないとしたら、「科学的に十分安全」というのが科学研究の限界というべきだろうが、科学者は「安全だ」と言うかもしれない。 以上